

幼児教育が、小学校教育が、変わります！

発達や学びをつなぎ、「学びの改革」を実現する
園・小接続カリキュラムの開発

【実践編 1.0】

信州幼児教育支援センター
長野県教育委員会

令和4年2月

【実践編 1.0】 目次

1	はじめに	1
2	市町村の取組	4
	○北安曇郡池田町の実践	4
	(1) はじめに	4
	(2) 保小接続部会の計画	5
	(3) アプローチカリキュラム作成のプロセス	5
	(4) スタートカリキュラム作成のプロセス	7
	(5) 保護者との連携	9
	(6) 実践エピソード	10
	○上水内郡信濃町の実践	12
	(1) はじめに	12
	(2) 育ちをつなぐ保学連携による子育て支援プラン	13
	(3) 学びをつなぐ実践にあたって	13
	(4) 「ふるさと学習」でつながる子どもの学び（コト）	14
	(5) 保学をつなぐ「わくわくノート」の取り組み（モノ）	17
	(6) 子どもの学びと育ちをつなぐ保護者との連携（ヒト）	18
	(7) まとめ	19
3	発達や学びをつなぐ手法としての保育ドキュメンテーション	20
	(1) 保育ドキュメンテーションとは	20
	(2) 実際に作ってみましょう	22
	(3) 対話のツールとして	23
	(4) 園と小学校の職員の対話へ	24

1 はじめに

「園・小接続カリキュラムの開発【実践編 1.0】」をお届けします。

学び手である子どもの視点に立って幼児教育や小学校教育を構想し、つなぎ、実践しようとする試みが全国で始まっています。しかし、園と学校の異なる活動形態での学びをどう接続するかは難しい問題です。また、連携するための組織体制や時間の確保、それぞれの基盤整備が十分整っていないことなど、関連する課題も少なくありません。子どもの主体性を尊重する幼児教育や小学校教育を実現するためには、子どもに育てたいのはどのような力なのかを保育者や教師が共有することが重要であり、同時に子どもの姿に注意を向け、知ろうとすることが欠かせません。また、これらを両立させるための具体的な実践や方法には「柔軟さ」が不可欠と考えられます。

本書では、積極的に園・小接続カリキュラムの開発に取り組んでいる池田町と信濃町の実践事例を紹介しています。いずれの実践も、子どもの立場から学びの主体性や連続性を大切にしたい幼児教育や小学校教育がどうしても実現できるかを問い、試みているものです。これらの取り組みは多くの地域に共通する前述の課題を明らかにするとともに、その課題に柔軟に対応し、工夫しつつ進められているといえます。

2つの町の取り組みに敬意を表するとともに、西山部会長をはじめ、本書のとりまとめに携わっていただいた皆様に感謝いたします。これを手がかりに、県内それぞれの地域に応じた接続カリキュラム策定の取り組み等が広がっていくことを願っています。

信州幼児教育支援センター長 太田光洋

園・小接続カリキュラムの開発【実践編 1.0】について

信州幼児教育支援センターでは、令和3年3月に発刊した【理論編 1.0】の理念の実現、そして各小学校で実施されているスタートカリキュラムや各園の保育実践の一層の充実を目的として、この【実践編 1.0】を作成しました。

本書には、各学校や園で、園・小接続カリキュラムの開発を進めていくための参考となるよう、県内で先進的に接続カリキュラムの開発に取り組んでいる自治体の実践を中心に、具体的な事例等を盛り込みました。

【実践編 1.0】作成の目的

◆【理論編 1.0】に基づいた接続カリキュラムの開発を支援

幼児期は生きる力の基礎を育てる重要な時期



やったあ、
全部売れたよ！

園での生活



遊びを通して、
友だちや先生と関わりながら
学んでいきます。



幼児期の教育を通して育まれた資質・能力をさらに伸ばす



どんな音が出るのかな？



学校探検で訪れた音楽室。
思い思いの楽器に触れ、
音への興味・関心を高めていきます。

小学校での生活



次は
「お地蔵様おに」
がいいな！

どうやって
やるのか、
教えて！



園で親しんできた遊びや
経験してきたルールを取り入れることで、
安心して主体的に活動に取り組むことができます。

2 市町村の取組

令和3年度に実施した「幼児教育実態調査」によると、県内で園小接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている市町村は約25%にとどまっています。発達や学びをつなぎ、「学びの改革」を実現するため、園・小接続カリキュラムの開発を先進的に進めている2つの市町村の取組を紹介します。

○ 北安曇郡池田町の実践

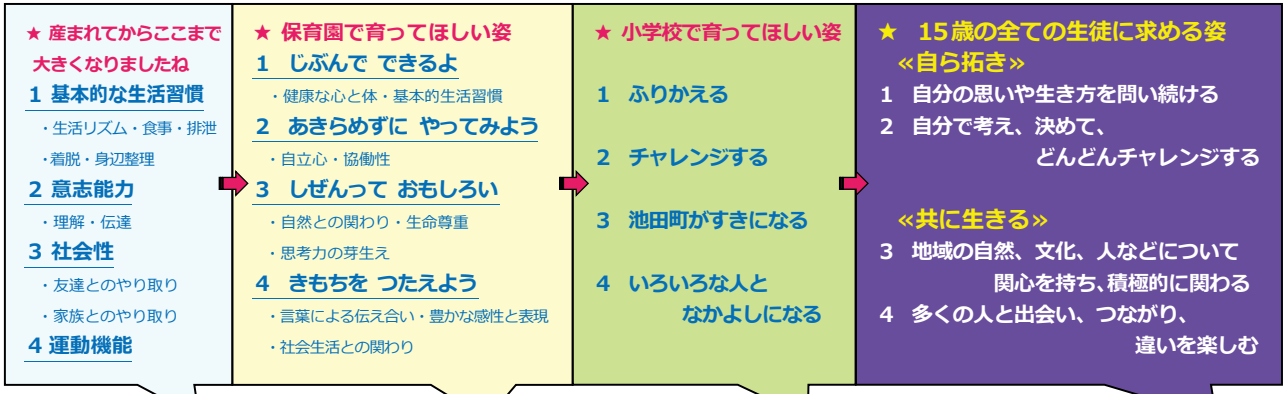
(1) はじめに

北安曇郡池田町は、人口約9,600人の北アルプスを望む田園地帯にあり、認定こども園（以下、園）2園（各園約100名）、小学校2校（各校約200名）、中学校1校（約200名）のコンパクトな自治体です。園の管轄を教育委員会に移して学校保育課を立ち上げ、行政施策はもとより、園・小学校・中学校の情報を相互に共有しやすくしました。

令和2年1月より、『池田町第2次教育大綱』が施行されました。基本理念に『子どもがまんなか 未来を拓く ひとづくり』を掲げ、基本目標のひとつに、「信州池田町学びの郷 保小中15年プランの推進」（以下、「15年プラン」）が示されました。「15年プラン」は、園、小学校、中学校の教職員が、0歳～15歳まで一貫して発達や学びをつなぎ、切れ目のない保育、教育をしていくという「系統」と「連続」を意識した方策です。園と小学校の接続は、「15年プラン」の中に位置づいています。

「接続」の考え方
理論編7ページへ

◇ 「15年プラン」 保小中の「育ってほしい姿」のつながり



ステージ	ホップ (育ちの土台づくり)				ステップ (学びの土台づくり)						ジャンプ (学びの発展と深化)					
学 齢	未満児 (未就園)				年少	年中	年長	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
年 齢	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15

「15年プラン」とは…

- ◆高校（入試）に合わせて中学校で準備する、中学校に合わせて小学校で準備する、小学校に合わせて園で準備するという、進学先のモデルや環境に子どもを合わせるという従来の考え方でなく、園（0歳から）での発達や学びを小学校、中学校に切れ目なくつないでいくという、子どもの成長に寄り添った理解と、子どもの多様性を尊重する保育、教育です。
- ◆園、小学校、中学校の教職員全員が、『15歳の全ての生徒に求める姿』を出口の情景として共有し、日頃の保育や授業等に取り組みます。保護者や地域のみなさまにもご理解いただき、様々な場面で、連携・協働を図ります。

教職員のつながりが基本です…

池田町では、「15年プラン」に基づいて、教職員が知り合い、つながる機会を考えた組織・部会、合同研修・合同行事等に取り組んでいます。

園長・校長会	毎月、園や学校の様子、子どもの様子、「15年プラン」の状況などについて語り合っています。園長先生と校長先生が仲良しになることで、町ぐるみの一体感が醸し出されています。
園主任・教頭会	年間4回、園や学校の運営、行事、交流、困り感を抱える子どもについて協議しています。
各種部会	連携担当主任部会・保小接続部会・研究主任部会・健康づくり部会・特別支援教育部会
合同研修・相互参観	年3回の合同研修会・保育参観旬間・小学校参観旬間・中学3年生授業参観 他
合同行事等	5校園読書旬間・5校園保健委員会・各種交流活動・0-15運動プログラム 等

(2) 保小接続部会の計画

合同研修等を開催する
理論編 13 ページへ

園小の接続は、主に保小接続部会で取り組んでいます。小学校担当校長の指示のもと、メンバーは、園主任・年長担任・小学校担当校長・1年生担任・特別支援教育担任・教育委員会です。部会の計画・内容は以下の通りです。

月	部 会 内 容
① 5月	◆第1回 ・園長・園主任による1年生参観振り返りと園小の接続 ・1年生担任の子ども理解の深化
② 6月	◆第2回 ・保育実践エピソード、授業実践エピソードを語り合う ・小学校授業実践と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のつながり
③ 7月	◆第3回 ・保育実践エピソード、授業実践エピソードを語り合う ・スタートカリキュラムの評価と改善
④ 11月	◆第4回 ・保育実践エピソード、授業実践エピソードを語り合う ・アプローチカリキュラムの共有
⑤ 2月	◆第5回 ・保育実践エピソード、授業実践エピソードを語り合う ・個々の子どもの発達や学びについての理解 ・保護者連携について ・アプローチカリキュラムの評価と改善

(3) アプローチカリキュラム作成のプロセス

接続カリキュラム
理論編 14 ページへ

① カリキュラム全体の見直し ～子どもの側に立って～

今まで当たり前のようにやってきた一つ一つの行事や活動を、子どもの側に立って見直しました。

- ・運動会や出初式など、子どもの負担にならないようにし、保護者や地域の要望や要請でなく、子どもが楽しめるように、できるだけ子どもの願いで計画できるようにしました。
- ・行事の際の慣例となっている作品等の制作をやめ、自由に表現する機会を増やしました。
- ・歯科指導や交通安全教室等に子どもが安心して参加できるよう、参観日に親子で行うようにしました。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿
理論編 8 ページへ

③ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目に分類

育成を目指す資質・能力の3つの柱に分けた行事や活動を、今度は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目に分類しました。「この活動にはこういうねらいを中心に、意識して取り組みたい。」など、活動の中で大切にしたいことに目を向けることができました。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、次の点も確認し合いました。

- ◆到達目標でなく、方向目標である。
- ◆個別に取り出して指導されるものでない。
- ◆子どもの自発的な活動としての遊びを通して一人一人の発達の特性にに応じてこれらの姿が育っていくもの。
- ◆全ての子どもに同じように見られるものではない。
- ◆卒園を迎える年度の子もだけでなく、その前の時期から、子どもが発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくこと。
- ◆この10項目を手掛かりに保育者と小学校教師とが話し合いながら、子どもの姿を共有する。
- ◆10項目はとても高いレベルである。

④ 小学校への接続部分の子どもの姿を園小で検討し見直しをもつ

卒園する3月までのカリキュラムを小学校にスムーズにつなげるため、小学校の先生方に4～5月のカリキュラム欄を作成してもらい、園小で検討しました。資質・能力の3つの柱が、園から小学校にどのようにつながっていくのかの見直しをもつことができました。

⑤ 評価・改善・開発 & 年中児・年少児

卒園する3月には、年長児としての自覚や、自信と意欲がどのような活動によって育まれてきたかを、カリキュラムをもとに振り返りました。子ども主体となると、前例・前年度踏襲の行事や活動にはなりません。次の年長児の発達や学びに合わせてカリキュラムの改善を図ります。

また、アプローチカリキュラムに接続する年中児・年少児のカリキュラムについても、発達課題が年長児にどのようにつながっていくのかを視点に考えていきます。

(4) スタートカリキュラム作成のプロセス

接続カリキュラム
理論編 14 ページへ

① 単元配列と週案の作成

1	『スタートカリキュラム スタートブック 必携!』	国立教育政策研究所 (平成 27 年 1 月)
2	『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム (スタートカリキュラム導入・実践の手引き)』	国立教育政策研究所 (平成 30 年 3 月)
3	『園・小接続カリキュラムの開発【理論編 1.0】』	信州幼児教育支援センター (令和 3 年 3 月)

小学校では、3学期に入り、上述の3つの資料をもとに、自校の<4～7月の単元配列・4月第1週～第3週の週案>を作成しました。「子どもの発達や学びを切れ目なくつなぐ」ために、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目を位置づけました。また、作成に関して次の点についても理解を深めました。

- ◆ 園での発達や学びのつながりを意識した指導・支援
- ◆ 指示を減らし子どもが考える場を保証した、主体性を培う支援や安心して学べる学習環境
- ◆ 子どもの姿に合わせた、モジュールによる時間割 (時間調整)、具体的な個別の支援
- ◆ 生活科を中心にした合科的・関連的指導の充実
- ◆ 全体一斉指導の後には、子どもの受け止めをとらえ、個別に支援

令和3年度 スタートカリキュラム 単元配列表 会楽小学校 4月


単元	4月
国語	<p>【書く・読む】① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ○読書が好きで学書が得意な ○読書が得意な人 ○読書の大切さ ○読書の大切さ、作るの大切さ</p> <p>【読むの大切さ、運動の大切さ】① ② ○道具で遊ぶ ○友達の大切さ、できるかな ○ボール、選手、ジャンブル ○読書の大切さ、作るの大切さ ○読書の大切さ、作るの大切さ ○いっしょに遊ぼう、できるよにならな</p>
算数	<p>【かく・比べ、探検しよう】① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ○学校生活、いろいろな探検の先生を知ろう ・保護者、職員室、図書室、コンクール など ・保健室の先生、校長先生 ・教務先生、事務室の先生 など ・図書の先生を知ろう ・遊びで遊ぼう</p> <p>○もつと知りた ・もつと知りたから探検の計画 をしよう ・探検の約束を決めよう ・グループに分かれて探検しよう ・探検が終わった後のこと ・見つけたものを報告しよう</p> <p>【みなさんよ、とどろけい】① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ○先生や友達と仲よく ○先生や友達と仲よく ○先生や友達と仲よく ○先生や友達と仲よく ○先生や友達と仲よく ○先生や友達と仲よく</p> <p>○先生や友達と仲よく ○先生や友達と仲よく ○先生や友達と仲よく ○先生や友達と仲よく ○先生や友達と仲よく ○先生や友達と仲よく</p>
生活	<p>【自分たちでできるよ】① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ○自分たちでできるよ、自分の力を ○自分たちでできるよ、自分の力を ○自分たちでできるよ、自分の力を ○自分たちでできるよ、自分の力を ○自分たちでできるよ、自分の力を ○自分たちでできるよ、自分の力を</p>
音楽	<p>【自分たちでできるよ】① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ○自分たちでできるよ、自分の力を ○自分たちでできるよ、自分の力を ○自分たちでできるよ、自分の力を ○自分たちでできるよ、自分の力を ○自分たちでできるよ、自分の力を ○自分たちでできるよ、自分の力を</p>
図工	<p>【自然と仲よし、季節を感じよう】① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう</p>
体育	<p>【自然と仲よし、季節を感じよう】① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう</p>
道徳	<p>【自然と仲よし、季節を感じよう】① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう</p>
外国語	<p>【自然と仲よし、季節を感じよう】① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう</p>
総合	<p>【自然と仲よし、季節を感じよう】① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう</p>
行事	<p>【自然と仲よし、季節を感じよう】① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう</p>

会楽小学校 スタートカリキュラム 令和3年 4月 第2週

曜日	4月12日	4月13日	4月14日	4月15日	4月16日
曜日	月	火	水	木	金
ねらい	4月、あしたも学校いきな 先生や友達と仲良くなろう。学習を始めよう。給食や掃除のやり方を知ろう。				
曜日	4月12日	4月13日	4月14日	4月15日	4月16日
時間	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目
科目	国語・算数・生活・道徳・図工・音楽・体育	国語・算数・生活・道徳・図工・音楽・体育	国語・算数・生活・道徳・図工・音楽・体育	国語・算数・生活・道徳・図工・音楽・体育	国語・算数・生活・道徳・図工・音楽・体育
内容	<p>【国語】 ○読書が好きで学書が得意な ○読書が得意な人 ○読書の大切さ ○読書の大切さ、作るの大切さ</p>	<p>【算数】 ○先生や友達と仲よく ○先生や友達と仲よく ○先生や友達と仲よく ○先生や友達と仲よく</p>	<p>【生活】 ○自分たちでできるよ、自分の力を ○自分たちでできるよ、自分の力を ○自分たちでできるよ、自分の力を ○自分たちでできるよ、自分の力を</p>	<p>【道徳】 ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう</p>	<p>【図工】 ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう ○季節を感じよう、季節を感じよう</p>

・スタートカリキュラム（4月の単元配列・4月第2週）の一部を掲載
 ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の10項目の位置づけ

右の2次元コードから、ダウンロードが可能です。



② スタートカリキュラムの理解と全校体制による新年度スタート

スタートカリキュラムを中心になって作成した前年度1年生担任が、新1年生担任に、諸々の情報を伝え、理解してもらい、スタートカリキュラムの計画をもとに進めるための情報伝達の時間がとても大切です。また、新1年生が生活しやすい環境にするために、全校体制で取り組むことも大切です。『スタートカリキュラム スタートブック 必携!』(平成27年1月)の16pには、管理職対象チェックポイントが記載されていて、スタートカリキュラムの効果的な活用として管理職のリーダーシップの下、全校体制で行うことが述べられています。

そこで、小学校長には、次のことに配慮してもらいました。

- 1 可能ならば、新1年生担任候補には、3月末にはスタートカリキュラムの理解を促す。
- 2 年度当初の「学校運営計画」にスタートカリキュラムを加え、準備職員会議で全職員での協力体制を組み、見守り、育てる指導・支援や生活しやすい環境を共有できるようにする。
- 3 場合によっては、前年度1年生担任が転任する場合もある。その際、スタートカリキュラムも含め、新1年生の情報を確実に引き継ぎ伝達できるように工夫する。
- 4 学級通信や4月の参観日後の懇談会で、保護者に園小の接続について説明して、安心感や信頼感を生み出せるようにし、連携できるようにする。

園小の接続を確かにするための試み・・・園長・主任の小学校参観

小学校1年生の担任が、4月当初、園からの発達や学びを意識し、それらをどのようにつないでいけばよいかのヒントを得るために、入学後の第2週には園長、第3週には園の主任に授業参観をしてもらい、アドバイスを受けます。

【参観の視点】

- 1 発達や学びがスムーズにつながっていると感じましたか。
- 2 子どもの成長・小学校生活への意欲が感じられましたか。
- 3 もっとこうした方がよい点は何ですか。
- 4 園でも考えたい点がありましたか。
- 5 その他（接続にかかわる内容・改良点等）

③ 評価・改善 & 2学期以降～6年生（中学3年生）まで

『スタートカリキュラム スタートブック 必携!』の14・15pには、スタートカリキュラムのマネジメントの評価の視点が記載されています。それらを参考にしながら、7月には、カリキュラムをもとに実践してきた内容を振り返ります。そして、年度末の3学期には、園の職員との懇談や保育参観を通じて、次の年長児の発達や学びに合わせたカリキュラムの改善を図ります。

また、2学期以降～6年生（中学3年生 15歳）まで、発達や学びの連続性・系統性を重視した取組になるように「15年プラン」に合わせて全職員でも協議していきます。

（5）保護者との連携

家庭との連携
理論編 16ページへ

入園の際には『入園のしおり』があり、基本的な生活習慣を身に付けられるように心がけることや、家庭との連絡、準備品等々のことが書かれています。また、小学校入学に向けた保護者説明会でも、入学までにできるようになってほしいことや準備品等々について伝達されます。どちらも、園や小学校が一方的にお願いしたい情報であり、保護者と共に連携して子どもを育てていく目標や内容、方法等についてはあまり触れられていませんでした。また、発達や学びを園から小学校に接続していく内容については扱われておらず、入園・入学後もほとんど話題になることはありませんでした。そこで、次の内容について園長、校長に配慮してもらっています。

<園で>

- ①『入園のしおり』に、「育成を目指す資質・能力」の3つの柱と、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の説明、「15年プラン」についての説明を加える。
- ②可能な範囲で、一人一人の子どもの発達や学びの姿を見える化（ラーニング・ストーリーのような手法を活用）して保護者に伝え、園児・保護者・保育者で共有できるようにしていく。
- ③園での発達や学びが小学校に接続していく姿を説明し、つなぎ役の担い手として保護者の支援が不可欠であること、どのような支援を園と保護者とで共有していくか伝えていく。

<小学校で>

- ①入学前の保護者説明会では、小学校への適応を考えて園で準備するのではなく、園での発達や学びをそのまま小学校につないでいく生活や学習を大切にしていくこと（ゼロスタートではない）、入学への過度のプレッシャーを与えないこと、小学校でやることを家庭で先取りしなくてもよいことを伝える。
- ②入学後の子どもの様子を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をもとに学級通信や保護者会等で示し、担任の願いに加え、保護者の支援のあり方を提案する。
- ③「15年プラン」・中学3年生までの接続について説明する。

(6) 実践エピソード



園 5歳児 3月 活動名『学校探検 Part 2』

小学校の一日入学では、1年生が懸命に園児の手を引いて校舎内を案内してくれますが、園児はお世話されているお客様のようなので、園児主体の活動ができないものかと考え、10月、散歩ついでに学校訪問(校庭で遊ぶ)をし、偶然居合わせた5年生と一緒に遊びました。(『Part 1』参照)



2回目は3月に園バスを利用し、小学校に遊びに行きました。事前に校庭で遊ばせてほしいことを伝えると、校長先生から、自由に校舎内を見てもいいという許可をいただきました。

「勉強しているから静かにね。」「この前のお兄ちゃんいるかな?」わくわくした気持ちを抱えて校舎内へ。色々な場所に散って行く子ども達です。

体育館の入り口からそっと覗いていると、小学校の先生から「入っていいよ。」と声をかけてもらい、ボール運動をしている2年生の様子を見学。「ドッジボールより難しそうだね。」と言いながら長い時間見学していました。聞こえてくる楽しそうな鍵盤ハーモニカの音に誘われて音楽室に行ってみると、1年生が鍵盤ハーモニカや木琴で楽しそうに演奏中でした。ついこの前まで年長さんだった子ども達がこんなに上手に鍵盤ハーモニカを弾き、楽しそうに歌っている姿を見てうれしくなりました。

肥後守(ナイフ)で削った鉛筆を見たり、ベンチでくつろいだりしながら、「1年生になったら、ここでいろんな相談をしたり遊んだりするのかな…」と、友達同士で語り合う姿も見られました。あっちの階段、こっちの階段と上ったり下りたりしながら校舎内を探検しました。

休み時間を知らせるチャイムが鳴り、小学生が教室から出て来ました。この前一緒に遊んだ5年生が子ども達を探しに来てくれました。他の学年の小学生も校舎内を案内したり、行きたい場所に連れて行ってくれたりしました。けん玉を披露してくれる小学生や先生の姿をじっと見て真似しようとする子どももいました。「小学校って楽しいね!みんな優しいね!また4月に来るね!」と教頭先生に挨拶して園に戻る子ども達は、小学校入学への期待をさらに膨らませたと思います。



自由に探検し、授業の様子も見ることができ、ありがたかったです。町の「15年プラン」のおかげで、職員同士の連携が取りやすくなり、以前の一日入学では考えられなかったような園児主体の交流、学校探検ができていく感じがします。子どもには、入学への不安な気持ちを払拭してもらったり、実際に校舎内を見ることで安心し、入学への大きな期待となったりする様子がうかがえました。「次に来るときは1年生だね!!」とうれしそうに話す笑顔に、大きな自信が感じられました。

右の2次元コードから、『学校探検 Part 1』がご覧いただけます。



小学校 4月 1年生担任のつぶやき 園での発達や学びを理解する

「スタートカリキュラム」を作成した前年度の先生から、「幼保からの発達や学びの接続を考える」という説明を受けましたが、入学の準備で忙しく、学校生活に慣れてもらうためにやらなければならないことが多々ある1年生でしたので、理解する間もなく入学初日を迎え、自分のこれまで経験した内容や方法でのスタートになってしまいました。

しかし、「園での発達や学びを小学校につながるためには、一人一人の子どもの園での育ちを理解しなくては進められない。今、目の前にいる子ども達は小学校ではなく園で育ってきた姿だ。具体的には何が育ってきたのだろう。」という思いから、小学校での一つ一つの学習や活動を、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目に分類して実践することにしました。

◇算数「いくつといくつ」(【9】の分解)

ねらい：【9】はいくつといくつでできているか考える場面で、いろいろな数の分解の仕方があることを、お互いの意見を出し合うことで認め合う。友達の考えを聞いて自分の考えを広げる。違う視点から考える力を身に付ける。

◆「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目との関係

カ 思考力の芽生え ク 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 ケ 言葉による伝え合い

子どもを理解する上で、この10項目に当てはめてみることで、何が育ってきているか少し見えてきました。4月は、園での一人一人の子どもの発達や学びを理解する月だと感じました。「自分でできることは自分でしようとする積極性」や「友だちの思いを受け止めて共通の目的の実現のために協働する力」など、園で育ってきた発達や学びを生活や学習につなげていきたいと思いました。

園長(第2週)・園の主任(第3週)の小学校参観より

◆園長・主任の参観のコメント(9p参照)・・・

- ・入学式に参加できませんでしたので、早い時期に子ども達の様子を参観でき、張り切っている姿が見られてうれしかったです。
- ・無理なく楽しく生活できていたのは、園からのつながりだと感じました。
- ・先生の質問について自由に発言し、全員が不安なく楽しく授業に参加できていました。
- ・「もう6歳だから！」と自信満々に卒園していった子ども達は、園では何でもできる、小さいクラスの子どもの憧れのスーパースターでした。何でもやってみたい意欲があり、何でもできてしまう子ども達です。「まだ6歳なのにこんなこともできるんだ！」という受け止めだけでなく、やりたいことができる時間を作ってほしいです。子ども達なりにできることがたくさんあります。自信と意欲が継続できるようにお願いします。
- ・支援の先生は子どもから離れて様子を見て、周囲の子どもが助けられるように支援してほしいです。
- ・園でやってきたことも取り入れてください。園小で共通の遊びや体操などができたらいいです。
- ・園でも、生活面だけでなく、友達関係で困ったこと等を考える機会を増やしたいです。
- ・卒園してからも子ども達の成長の様子を共有できるのはとてもありがたく、幸せです。

◆それを受けて、小学校1年生担任は・・・

- ・今までは勢いで子ども達を引っ張り、のせてしまうやり方が多かったです。1年生でもかなりのことができるということに気付かされ、「自分たちでやっていい、考えていい」という園で育ってきた環境をつないで、子どもに任せる方向でこれから取り組みたいと思いました。
- ・園で何が育ってきているか、さらに子どもを見つめ、理解していきたいと思います。また、失敗を大事にできる子ども、表現できる子どもになってもらいたいです。

○上水内郡信濃町の実践

(1) はじめに

接続の考え方
理論編 7ページへ

◇教育大綱に基づく園と学校（保学）の取り組み

信濃町には、4つの保育園（園児約150名）と町内唯一の義務教育学校である信濃小中学校（児童生徒約470名）があります。

保育園では、「子ども一人一人を尊重し慈しみ、子どもの最善の利益を守り、保護者・地域とともに子育てができる保育園」を目指して日々の保育に取り組んでおり、信濃小中学校では、「信濃町に誇りをもち、次世代を担う人材の育成」を学校の基本理念とし、日々の教育に取り組んでいます。

また、令和2年度に策定した第2次信濃町教育大綱の基本方針の一つに「子どもの未来を育む質の高い教育環境づくり」があります。その中には、子どもの「育ち（発達）」と「学び」を園と学校が連携して接続するための基本計画（主要施策）が次のように定められています。

「育ち」について

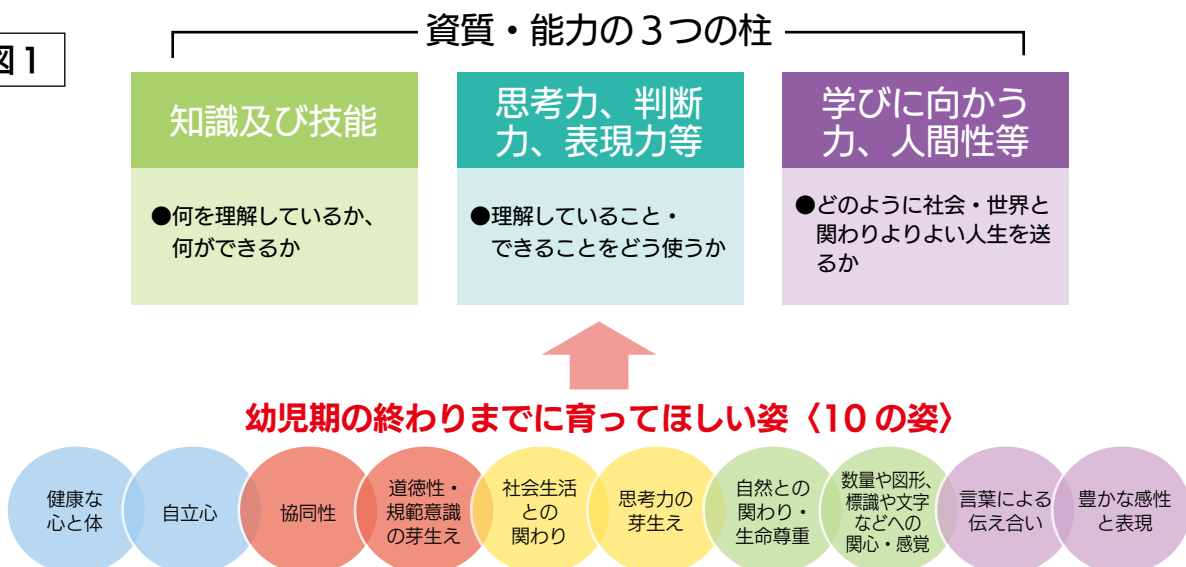
- 「保学連携による子育て支援プラン」に基づいて、一人一人の子どもの育ちと特性を理解した子ども支援に就学前から一貫して取り組みます。
- 一人一人の子どもの特性に合わせた学びの場を適切に選択できる教育支援体制を整備し、子どもの成長に寄り添いながら、各関係機関をつなぐ専門職員を配置し、乳幼児から一貫した特別支援体制整備の推進に努めます。

「学び」について

- 教職員の研究・研修活動を充実させ、教育の質の向上を図るとともに、保育園と学校での「ふるさと学習」を通じた教育活動によって子どもの主体性と郷土愛を育みます。
- 保育園で育んだ子どもの主体的な学びを信濃小中学校で生かせるよう保学接続の強化に努めます。

子どもの育ちと学びにおいては、保育所保育指針の「10の姿」を新学習指導要領の「資質・能力の3つの柱」へどうつなぐのかが重要になります。（※図1）

図1



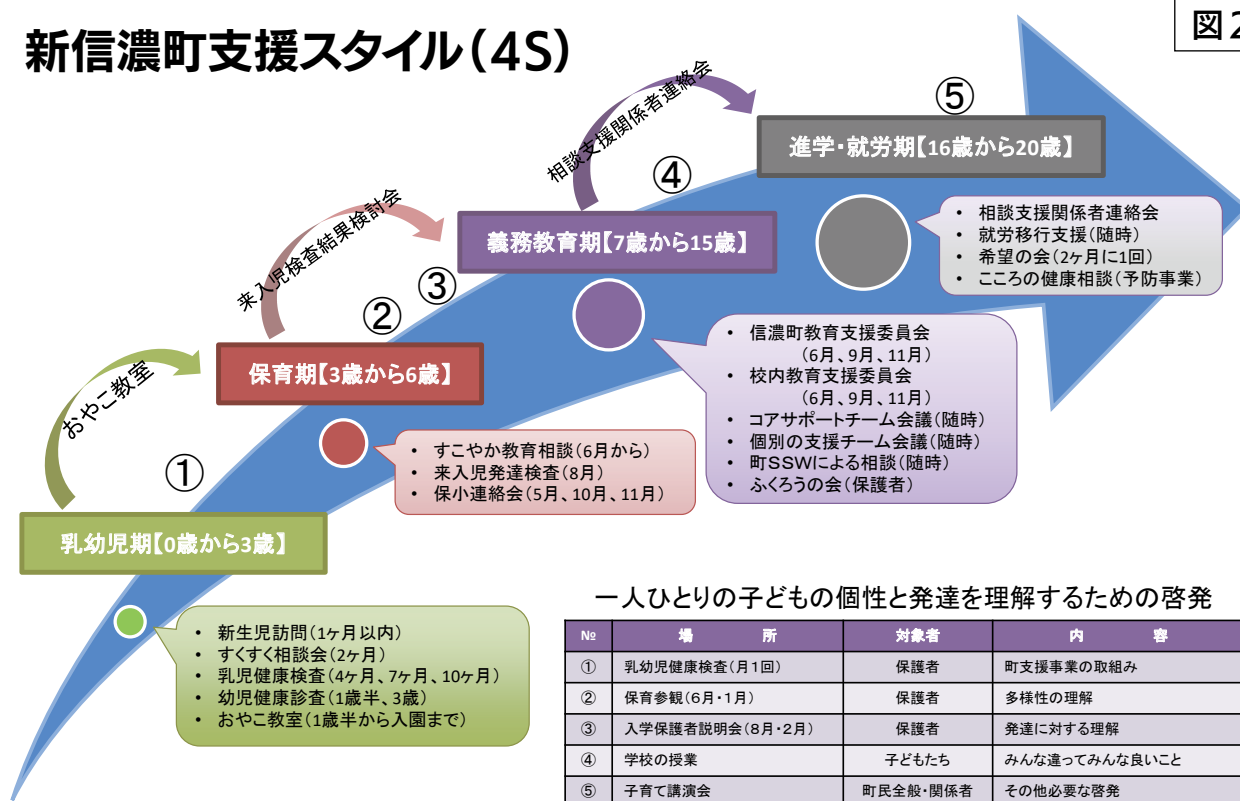
(2) 育ちをつなぐ保学連携による子育て支援プラン

信濃町では、子どもの育ちをつなぐために、「保学連携による子育て支援プラン」(以下「プラン」)を平成25年度に作成しました。プランによって、住民福祉課で所管していた保育園、児童クラブ、子育て支援センターを教育委員会が所管し、幼児期と学齢期の子育てに関する施策の一体的な取り組みと子ども・子育てに関する相談窓口の一本化を行ってきました。

また、プランの中には、すべての子どもの成長を切れ目なくつなぐ新信濃町支援スタイル(4S)が示されています。(※図2)「コト」「モノ」「ヒト」の3つの要素で子どもの育ちをつなぎながら、子どもに関係する機関の連携(横のつながり)と、子どもの成長とともに移行する子ども・子育て支援の事業の流れを関係者が意識(縦のつながり)することによって、一人一人の子どもの特性や個性に応じた支援を一貫して行うものです。

新信濃町支援スタイル(4S)

図2



(3) 学びをつなぐ実践にあたって

合同研修等を開催する
理論編 13 ページへ

◇園と学校が大切にしたい子どもの姿を共有

これからの世界は、人工知能を中心としたICTが進展するSociety5.0、持続可能な開発目標SDGs、脱炭素社会を含めたグレートリセットなど予測できない未来へと向かっています。このような未来に対して、受け身ではなく、主体的に向き合い、関わり合い、その過程を通じて、一人一人が自らの可能性を最大限に発揮しながら、より良い社会と幸福な人生を自らが創り出していくことが重要になります。

そこで令和2年9月、未来を創る人材育成にとって大切にすべき子どもの姿を園と学校が共有し、子どもの学びの接続ができるよう、信濃町保学連携カリキュラム作成協議会(以下「協議会」)

を設置しました。協議会では、保育士と教職員を中心メンバーとしたワークショップを2回開催しました。1回目のワークショップでは、「園から学校へ接続すべき大切なことは何か？」をテーマに話し合いました。メンバーから出された意見をテキストマイニングによって分析した結果、「主体性」「一人一人」「自己決定」といったキーワードが見えてきました。2回目のワークショップでは、園から学校へ接続すべき一人一人の子どもの主体性をどう育てていくかについて話し合いました。子どもは成功や失敗などの具体的な経験を重ねながら試行錯誤の中で学んでいることから、子どもが主人公（主体）になれるような学び（遊び）が大切であることが共有されました。

協議会では2回のワークショップの結果から、①子どもが主人公（主体）になれる一人一人の興味関心をつなぐ【接続】 ②保育士と教職員が共通のテーマについて話し合い、お互いの環境（園↔学校）を知ることができる交流を深めていく【連携】 これら2つの事項について保学で共通理解を目指すことにしました。

（4）「ふるさと学習」でつながる子どもの学び（コト）

接続カリキュラム
理論編 14 ページへ

信濃町には、恵まれた自然、歴史と文化、産業など多くの地域資源があります。幼児教育期の保育の中で地域の人との関わりや地域資源をとおした遊びや食育を通じて、子どもたちは様々な経験をしています。また、信濃小中学校では、これらの地域資源を学習材として、生活科の学習や総合的な学習の時間に「ふるさと信濃町」を学んでいます。（※図3）

ふるさと学習の定義

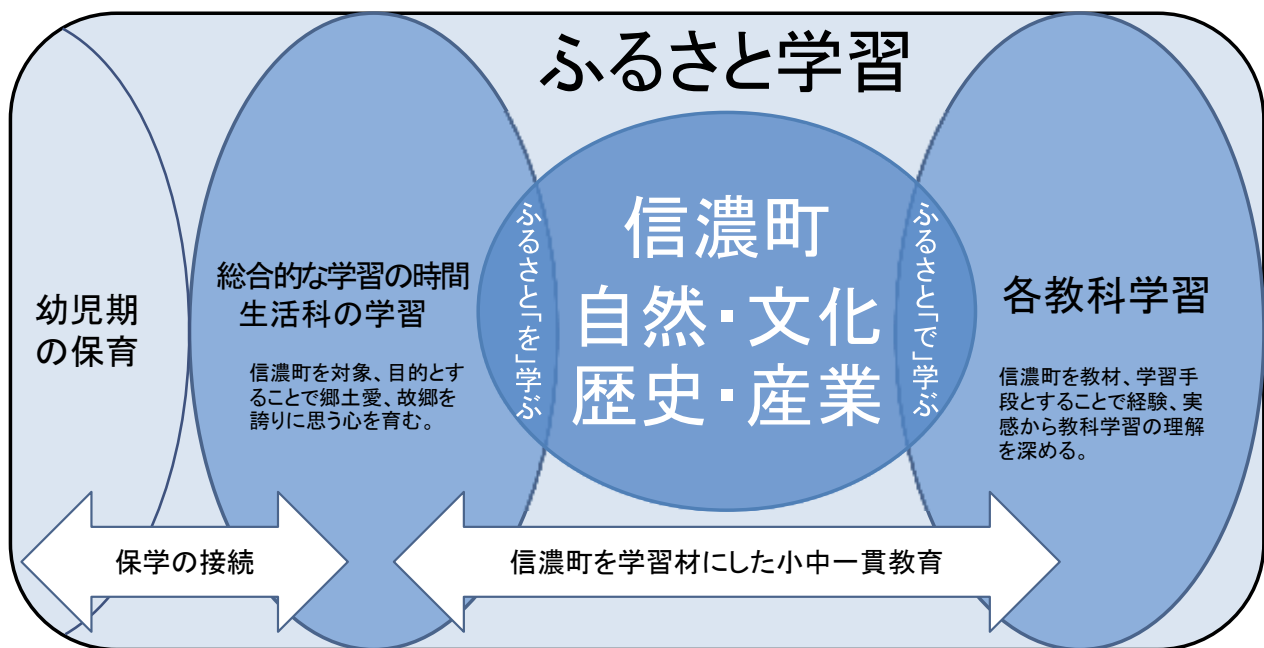


図3

◇園での豊かな自然を使った遊び

子どもたちは、自然の中で偶然に出会うモノやコトに対して「面白そう」「何かな?」「不思議だな」という気づきをもとに、様々な遊びを創り出していきます。草花や木の枝、木の実、ツルや葉っぱを材料に一人一人が感性を生かしながら、目的をもった活動に発展する姿が見られます。組み合わせや配置、必要な物や道具の使い方などを考え、納得がいくまで取り組めるよう、保育者は

学びの環境を創り続けています。(※写真1)

また、信濃町の子どもたちにとって、身近に生き物がある環境は自然なことであり、飼育しているというより、まるでクラスの一員のような存在です。飼育している生き物をじっくり観察することで、「うんちしている。人間と一緒にだね」「なんていう名前か、図鑑で調べてみよう」「食べないと死んじゃう。エサは何だろう」など、徐々に「生きていること」「生命の不思議」を理解するようになっていきます。



写真1

年中児（4歳児）の時に会ったカナヘビの飼育では、冬眠する条件を子どもたちが調べ、1週間をかけ、園舎の中で飼育に適す場所を探して越冬させました。年長児（5歳児）になってもそのカナヘビを大切に飼育していましたが、ある日ひなたぼっこさせてあげようと飼育ケースを外へ出したところ、しばらくしてカナヘビが動かなくなっていました。子どもたちは大きなショックを受けながらも「なぜ死んでしまったのか」について話し合いをはじめました。「暑かったんだよ」「熱中症になったんだ」「水も飲まないでずっと日なたにいたからじゃないかな」「私たちは扇風機もあったし、水も飲んだし」と自らとカナヘビを重ねながら、子ども同士で対話を続けていきました。やがて「カナヘビが残してくれた卵を大切に、生まれてくる赤ちゃんをしっかりお世話しよう」「お墓を作って天国から見えてもらおう」と、思いもよらない出来事から立ち直り、次の前向きな行動へつなげていく姿が見られました。悲しい経験となりましたが、命の大切さや尊さを友だちと共有したことで、調べても飼育の方法が分からない生き物は自然に帰すようになりました。

こうした日常の中での出来事が、子どもたちにとって大きな感動や意欲をもたらし、行動する力を育んでいきます。

◇興味関心の深まりによる遊びの進化

年長児（5歳児）になると、それぞれの好奇心を友だちとより深く共有し、一緒になって一つの目的に向かって遊びを発展させていく姿が見られます。例えば、ザリガニの飼育によって芽生えた水生動植物への興味から、これまでの生き物との関わりで得た知識や経験を生かしながら、園の敷地内にザリガニを飼育できる池を作りたいと考えました。みんなで協力して穴を掘って水を流し入れて池を完成させましたが、やがて「時間が経つと水がなくなってしまう」という気付きを得ました。そこで、保育者は、ため池について詳しいことを知っている博物館の館長に相談してみることを提案し、館長から穴の底にビニールシートを敷くアドバイスをもらいました。またその後実際に本物のため池を見に行きました。子どもたちは、本物のため池にもビニールシートが敷かれていることを確認してから、館長からもらったビニールシートを穴の底に敷き「時間が経つと水がなくなってしまう」という問題を解決しました。(※写真2)



写真2

子どもにとって向き合う遊びの対象

が魅力的であれば、「もっとこうしてみたい」との思いが自然に湧き上がってきます。遊びの中で起きる課題や問題は都度変化しますので、これまでの成功や失敗の経験から試行錯誤を繰り返して、遊びの中から学び取っていきます。また、その課題を仲間と共有し、協力したり、議論したりしながら他者と協力する経験を重ねることで、人と関わることの楽しさを学んでいます。保育者は、子どもの行動を注意深く観察しながら「今、この子は何に夢中になっているのか」「なぜこのような行動をするのか」といったように、子どもの気持ちに自分を重ねて想像した上で、「何が成長していて、そのために今、何をすべきか」について、専門性を生かして、必要な援助や環境の構成をさりげなく行えるようにしています。

◇園の遊びからつながる体験的な学び

信濃小中学校は小学生と中学生が一つの校舎で生活をする施設一体型の義務教育学校であるので、入学当初の1年生は、学校の校舎の大きさや新しく出会う友だちや先生に期待を持つ一方、戸惑う姿も見られます。そのため生活科では、4～6月にかけて「学校探検をしよう」の時間を組み、子どもたちが自分の学校を知るとともに、友だちや先生との関わりを深めていく機会としています。

学校探検では、学習プリント等を持って学校中を巡り歩きながら、校内地図を見て、特別教室の場所を確認したり、どんな教室なのかクイズ形式で探し当てたりしながら校舎内を探検します。園での体験から、発見したものや気付いたことを友だち同士で話し合ったり、調べたりする姿が見られました。そうして得られた成果を子どもたちが感じたありのままにメモをしたり、絵に描いたりする姿から、遊びから学びへの道筋が見えてきました。（※写真3）

生活科で扱う学習内容や活動は、その時々の子どもの興味関心で変容していくものだと考えています。園での様子を実際に見聞きし、情報を収集し、入学してくる子どもに合わせた活動を工夫することの重要性を感じています。そのため園と学校との情報共有や連携は必須であり、生活科だけでなく、各教科や領域の学習においても、スタートカリキュラムの作成段階からその時々の子どもの実態にあわせて作成することが重要になってきます。



写真3

◇ふるさと学習による学びの進化

幼児教育から初等部（1～4年生）までの体験から身のまわりへの知的好奇心を高めていき、高等部（5～9年生）では、自ら問いを設定し、試行錯誤を繰り返しながら友だちや地域の人々と対話し、一人一人が自ら答えを導いていく課題解決学習を大切にしています。例えば7年生（中学1年）のふるさと学習の中で、あるグループは信濃町の水に興味を持ち、町役場の水道係を訪ねました。そこで冬期間にかなりの量の漏水事故が起きていることを知り、生徒同士で話し合い、問題を解決するための学習を進めました。そこで、町の水道係と連携をして、水のPRキャラクターを創り住民へお知らせすることで、宅内漏水を防ぐという答えを導き出しました。（※写真4）このように、ふるさと学習は、学校だけで取り組めるものではなく、地域の人たちの協力を得ながら、



写真4

子どもたち一人一人の学びが深まるよう地域に開かれた学習としておこなわれています。

今回のふるさと学習の実践をとおして、園のまわりの恵まれた自然への興味関心は、1、2年生の生活科や3年生の理科の学習にもつながっていくことから、園で身に付けた探究的な遊びは、各教科の理解を支える力になる姿も見えてきました。(※図4)

図4

保学で取り組むふるさと学習

学年	各学年での重点目標(願う姿)	野尻湖ナウマンゾウ博物館	一茶記念館	その他
年長	生活や遊びの中で一つの目標に向かい力を合わせて活動し、達成感や充実感を味わう子ども	小動物の飼育	一茶カルタ	周辺のお散歩
1年	信濃小中学校が大好きな子ども		一茶カルタ(国・生)	
2年	信濃小中学校のまわりの地域が大好きな子ども		俳句づくり(国)	
3年	信濃町のいいところを実感する子ども	昆虫と植物(理)	一茶俳句学習(総)	町内巡り(社)
4年	信濃町の食や人に感謝の気持ちをもつ子ども	クリーンラリー(総・理)	一茶まつり(音)	米作り(総)
教支*	信濃町とつながる子ども	地域で生活するためのスキルと関わりを持てる個別の指導計画		
5年	信濃町の環境に興味をもつ子ども	流水の動き(理)		合同キャンプ
6年	信濃町の歴史に興味をもつ子ども	石器時代(社) 地層の見学(理)	江戸時代(社)	町議会傍聴(社)
7年	信濃町の人と生きる子ども	火山と地震(理)	俳句づくり(国)	合同キャンプ
8年	信濃町で働く人と生きる子ども	動物の体のつくり(理)		職場体験(総)
9年	信濃町に暮らすことに誇りをもつ子ども			ふるさと学習のまとめ発表(総)

※教支…教育支援

(5) 保学をつなぐ「わくわくノート」の取り組み(モノ)

接続カリキュラム
理論編 14 ページへ

◇一人一人の興味関心をつなぐ「わくわくノート」を作成



写真5

園では、一人一人の子どもの興味関心について1年生の担任に知ってもらうため、令和2年度から「わくわくノート」を作成することにしました。(※写真5)「わくわくノート」は、子ども一人一人の主体性を尊重したもので、園では一人一冊のA4ノートを用意し、自分(子ども)の好きな写真を貼ったり、絵を描いたりしながら、自由に中身を作ってもらうことにしました。ノートを週に1回家庭へ持ち帰ることで、子どもが親に自分自身の興味関心のあることを伝えたり、

一緒に書いて成長の過程を残したりすることで、親子のコミュニケーションツールにもなりました。また、子ども自身が作成するノートを通じて、保育者と保護者が子どもの様子を共通理解できるようにもなり、これまで以上に、その子の個性を保護者と一緒に受容し、共感し、応援することがしやすくなりました。

◇学校での「わくわくノート」の取り組み

園で作成された「わくわくノート」の活用は新1年生の担任、支援員に渡されることから始まります。担任を中心に「わくわくノート」を見ることで、入学してくる新1年生一人一人がどんなことに興味関心があるのか、どんな育ちをしてきたのかを理解することができ、入学当初の授業の構想に有効でした。

入学式を迎え、新しい場所での学びが始まった子どもたちは、「わくわくノート」を媒体として自己紹介を行ったり、教室に「わくわくノート」を設置しておくことで、年度当初だけでなく休み時間等に、子ども同士が「わくわくノート」を媒体として関わったりする姿が見られました。特に「わくわくノート」に写真や絵が貼ってあるものは、子ども同士でも話題にしやすく、文字のみよりも具体物としての写真や絵があるノートが子どもたちの関わりを促進する可能性を感じました。

「わくわくノート」は、入学した後も、園と同じように人と人をつなげる役割を担っているため、今後は、各教科や領域の学習活動の中に取り入れていくことで、スタートカリキュラムの更なる充実を目指していきたいと考えています。

(6) 子どもの学びと育ちをつなぐ保護者との連携（ヒト）

家庭との連携
理論編 16 ページへ

子どもの学びと育ちをつなぐ上で、保護者との関わりは重要なものになります。そこで、協議会では、以下の2つの視点から保護者との関わりについての検討を行いました。

◇入学前の説明会資料の見直し

子どもの学びと育ちをつなぐためには、入学という大きな環境変化に対する保護者の不安を解消し、安心して入学を迎えられるようにすることが大事です。そのことから、これまで使用していた入学説明会の資料の見直しをしました。これまでは、「入学前のしつけなど」として、『(1) 人の話を最後まで聞ける子に、そして思ったことをはっきりいえる子に、(中略) (7) 食事を30分くらいで済ませ、好き嫌いのない子に (8) 朝食・排せつの習慣を大事に』などの学校入学前に家庭でやってきてほしいことが列挙されていました。しかし、学校教育目標と保育所保育指針で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、子どもの成長を園と学校が連携して見守っていることを伝えるために、タイトルを「園と学校、家庭をつなぐ ～子どもの育ちと学びを支えるために～」に変更し、見出しも「(1) 園も、学校も楽しいところ、(2) 子どもの育ちと学びを支え、成長を一緒に喜び楽しむために大切にしたいこと」と変更し、園での遊びが学校での学びへとつながっていることを意識できる内容にしました。

◇「すこやか教育相談」による保護者との連携

新信濃町支援スタイル(4S)の理念である、切れ目のない支援によって「子どもたち一人一人が自分らしく楽しく生活をしていけるように」という視点から、園に在籍する子どもを対象に「すこやか教育相談」を実施しています。「すこやか教育相談」はすべての保護者を対象としていますが、子どもの成長・発達に関する心配や学校生活への不安についての相談が多くなっています。そのような保護者の心配や不安を軽減するための相談体制は、教育委員会、教職員、保育士に加え、外部機関の専門家(医療、福祉等)で構成しています。様々な関係機関が関わり保護者の不安を聴き取りながら、就学に向け入学後の学びと育ちをつなぐ方法を検討します。

また、学校の教職員が子どもたちへの様子を「聞いて知る」だけでなく、子どもたちと直接関

われる機会を設けて、実際の様子を「見て知る」ことも行っています。これらのことにより、入学前から教職員が子どもたちと関わり、具体的な支援について保護者と確認をしたり、園で行っている合理的配慮を、保護者も含めて共有したりしながら入学の準備を進めることができます。

(7) まとめ

信濃町では、教育大綱をもとに、園と学校のつながりを意識し、「子どもの主体性」をキーワードとして、「保学での体験的な学びのつながり（ふるさと学習）」「わくわくノート」「育ちをつなぐ保護者との連携」による取り組みを行いました。子どもの主体性を育むには、画一的なカリキュラムを設定して、大人が指示をするのではなく、子どもが思考し、自己決定をして行動することができる「余白」をつくり、その活動を支えることが大切であることが分かってきました。

また、協議会では、これまで取り組んでいた実践を更に見直しながら、保育士と教職員が、子ども理解を共有するための交流や、子どもの姿を丁寧に接続するための機会を増やしていくことが重要であることも分かってきました。

そこで、今後は教育委員会で1年生を担当する教職員と園の年長児を担当した保育士との顔合わせをして、連携しやすい体制を整えていきます。「わくわくノート」や「保育要録」を使用しながら、学校でのより良いスタートがきれるよう取り組んでいきます。さらに夏休み中に教職員の園での研修を計画し、教職員と保育士が子ども一人一人への理解が共有できるよう環境調整に努めていきます。（※図5）また、今回の実践をもとにして、年間を通じた園と学校での接続カリキュラムの検討を続けながら、子どもの成長を支えていきたいと考えています。

図5

月	園・小連携計画	月	園・小連携計画
5	保小連絡会①（入学後児童参観）	4	保小連絡会①（顔合わせ）
8	保育参観 来入児検診 入学説明会①	5	保小連絡会②（入学後児童参観）
10	来入児交流会	8	保育参観 来入児検診 入学説明会① 研修
11	保小連絡会②	10	来入児交流会
2	入学説明会②	11	保小連絡会③
3	来入児体験入学	2	入学説明会②
		3	来入児体験入学 学校・教育委員会との連絡会（接続確認）

3 発達や学びをつなぐ手法としての保育ドキュメンテーション

子ども一人一人の発達や学びの履歴を知る上で、卒園に際して園から送られてくる要録は大変参考になります。一方、活動の節目はもちろん日常的にも、幼児期における具体的な育ちの姿の理解を深めるものとして、次のような取組も始まっています。

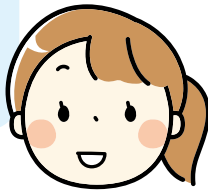
(1) 保育ドキュメンテーションとは

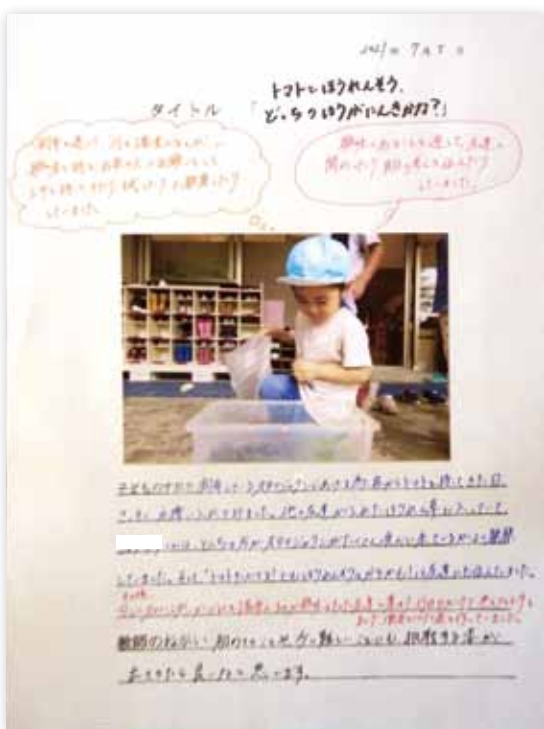
保育ドキュメンテーションとは、日々の記録や実践を、写真等を活用し可視化したものであり、現在様々な園で取り込まれるようになってきています。

本来、保育ドキュメンテーションは、「学びのプロセスを可視化する対話のツール」として、同僚との対話や子どもとの対話、保護者との対話等に活用されてきました。保育の見える化につながる保育ドキュメンテーションは、幼児期の発達や学びを小学校教員へ伝える対話のツールとしても、活用が期待されています。



園での活動も、まさに探究そのものだわ。
 小学校は、ゼロからのスタートではないのね。
 保育ドキュメンテーションによって、保育の様子がよく分かるようになったわ。





保育ドキュメンテーションと一口に言っても、園によって様々な形のものがあるでござる。



デザイン制作：高橋 文子 監修：角川 真子
 学び応援キャラクター「信州なび助」
 ©長野県教育委員会信州なび助

ドキュメンテーションの導入が保育者の多忙化につながらないように、それぞれの保育現場にあった取組となるよう工夫することも重要です。

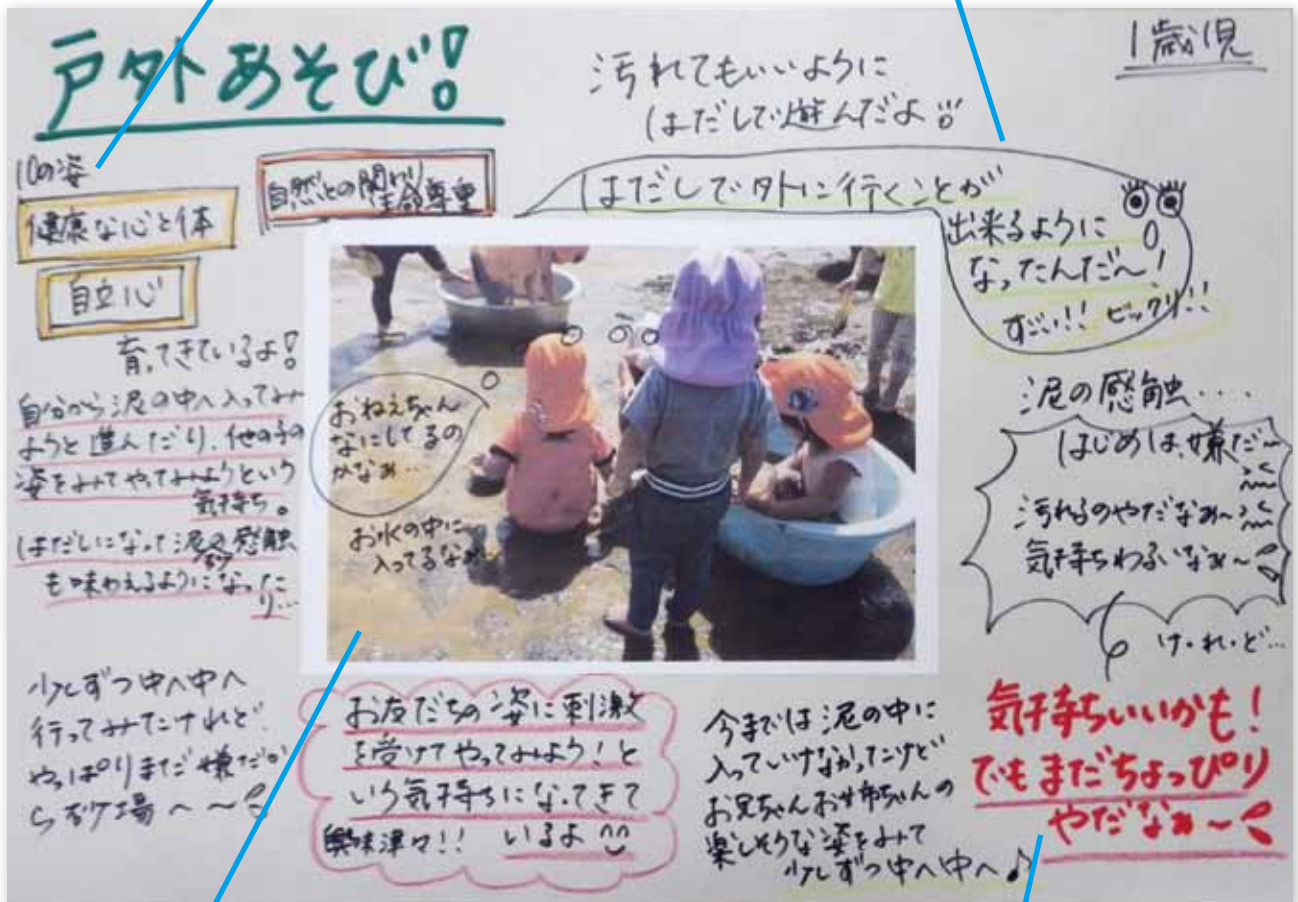
(2) 実際に作ってみましょう

【子どもの育ち】

幼児期の終わりまでに育てほしい姿 (10の姿) を視点にしています。

【保育者の思い】

書き手の驚きや気付きは、読み手の気付きへつながります。



【写真】

子どもが何を考え、何が育っているのかが伝わってくる写真が Good !

【子どもの姿の読み取り】

子どもの内面を読み取ることで、子ども理解につながります。

※あくまでも一例です。園でそれぞれ書き方を工夫してみましょう。

ポイント、エピソード記録として残すこと

外から見えること	やったこと 「～しました」	過去形だと、見たままの活動報告になりがちです。
	より	現在形で、経過や過程にスポットライトを当て、内面を読み取りましょう。
内から見ようとすること	何を学んでいるか 「～を学んでいます」 何が育っているか 「～が育っています」 「～を楽しんでいます」	

(3) 対話のツールとして

文章だけの保育記録と異なり、写真をつけた記録とすることで、視覚を通してエピソードを共有しやすくなります。さらに、写真に合わせたコメントにより、子どもの姿がより見えるようになります。保育ドキュメンテーションは、保育の可視化や言語化、つまり、**保育の見える化**につながっていくのです。また、保育ドキュメンテーションの作成は、子どもの姿をよく見ようとする保育者の変化を生み出すとともに、自身の保育の振り返りにもつながっていきます。保育ドキュメンテーションは、他者や自己との対話を生み出していくツールにもなるのです。

【育ち合い、学び合う関係へ】



子どもとの対話



自分との対話



小学校職員との対話



保護者との対話



同僚との対話



保育の見える化が、
対話を生み出していくでござる。



デザイン制作：長野県立大学 教育学部 発達教育学系 信州なび助
 学び応援キャラクター「信州なび助」
 ©長野県教育委員会信州なび助

(4) 園と小学校の職員の対話へ

園での子どもたちの育ちを見える化し、発達や学びをつなぐために、保育ドキュメンテーションを園と小学校の職員の対話のツールとして活用している事例を紹介します。



園では、保育ドキュメンテーションを作成しています。保育者がどういうところを見て、どのように子どもの育ちを捉えているのかを見ていただけたらと思います。園と学校は違いもありますが、このような育ちをしている子どもが小学校へ上がっていくことを意識して、子どもと向き合うのが我々の仕事ではないかと考えます。

こうした吹き出しは、教師自身も活動の中に入っていないと、書けないですね。



園でも色々な体験をしているのですね。

保育のことを知らない自分に気がきました。



「保育ドキュメンテーション」を囲み、園と小学校の職員が子どもの育ちについて、語り合いました。

やりたいことをとことんやってきた子どもたちが、小学校に入学し、時間で区切らないといけなかったり、やりたいことだけではなく、やらなくてはいけないこともやるとなったりした時に、そこに向かう気持ちの切り替えやエネルギーはどうしたらいいのか悩みます。

園では、「次への期待感」をもてるのが大切なと考えています。



子どもたちが、次の時間の授業を楽しみに思っているのか、もう一度、考え直してみないといけないと気付かされました。

小学校では、時間割や学習内容が決まっているので、「次はこうしよう」と言ってしまうがちだが、そうすると子どもの気持ちののらないことが多い。まずは子どもがやっていることを教師自身が知り、それに合った声かけをしていかないといけないのだと感じた。



学校はやらないといけないことばかりで、園とのギャップがある。そのギャップの中でも一年生は何とかやっているが、うまくいかなくなることもある。我々は、何かに原因を求めたくなることもあるが、やっぱり我々が勉強をする必要があるのだと感じた。そして、もっと園のことを知れば知るほど、その対応力がついてくるような気がした。



保育ドキュメンテーションに記された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が手がかりになり、園と小学校の職員が子どもの成長を共有することで、幼児期から児童期への発達の流れを理解することができたようござる。まずは、互いに一歩ずつ歩み寄っていただくことが大事でござる。



学び応援キャラクター「信州なび助」
©長野県教育委員会信州なび助

信州幼児教育支援センター関係者名簿

1 運営会議

太田 光洋（長野県立大学こども学科長）
海野 暁光（長野県保育連盟会長）
宮川 義典（長野県私学教育協会理事）
内田 幸一（長野県野外保育連盟理事長）
野中 祥子（長野県県民文化部こども若者局長）
尾島 信久（長野県教育委員会教育次長）

2 幼保小接続部会

西山 薫（清泉女学院短期大学副学長・幼児教育科科长）
上原 貴夫（佐久大学客員教授）
安達 仁美（信州大学教育学部准教授）
関 裕子（上田女子短期大学専任講師）
大久保聡子（伊那市立竜東保育園長）
中島 公子（松本青い鳥幼稚園副園長）
渡辺 徹（古牧東部保育園長）
小林己和子（東御市立和保育園長）
西片紀美子（松本光明幼稚園長）
尾台 弘枝（信州大学教育学部附属幼稚園教頭）
丸山 高德（池田町教育委員会学校支援コーディネーター）
山原 清孝（信濃町教育委員会総務教育係主幹）
田中 智之（松本市立明善小学校長）

3 県関係課

藤木 秀明（こども・家庭課長）
河野 貴（こども・家庭課課長補佐兼保育係長）
川上 真実（こども・家庭課保育専門推進員）
飯田 光子（こども・家庭課保育専門推進員）
藤田 良子（こども・家庭課自然保育普及推進員）
西村 智美（次世代サポート課青少年指導主事）
久保田 学（私学振興課私学振興専門員）
荻原 佑菜（教育政策課企画係主事）
傳田 浩章（特別支援教育課指導主事）

4 事務局

曾根原好彦（学びの改革支援課長）
白井 学（学びの改革支援課義務教育指導係長）
橋爪 典子（学びの改革支援課幼児教育コーディネーター）
鈴木 崇晃（学びの改革支援課指導主事）
古旗 明（学びの改革支援課指導主事）

【令和4年2月現在】

園・小接続カリキュラムの開発【実践編 1.0】

令和4年2月28日発行

編集者 信州幼児教育支援センター
（長野県教育委員会）

印刷所 社会福祉法人 ながのコロニー
長野福祉工場